

金瓜石鉱山の文化的景観を再読する

Re-read the Cultural Landscape of Jinguashi Mining Sites

琉球大学国際地域創造学部
波多野 想

はじめに

金瓜石鉱山の文化遺産としての価値は、どのようなものか。それは、文化部文化資産局がいうように、鉱山開発の発展的側面にあるのか。それは一面的には正しい。事実、田中事務所や藤田組による大規模な開発が行われて以来、常に生産量の増大化が進められてきた。

しかしそれは、産業としての鉱山に関する説明に過ぎず、唐突に出現する鉱山町を中心とする地域社会と、被支配的な物的環境に変貌した旧来の地域社会およびその再編に関する議論を含んでおらず、文化的景観としての鉱山の実態把握からはほど遠い。

ある空間における異質な要素の進入は、異文化間の衝突や融合などの相互作用を惹起する領域を新たに出現させる。そしてそれは、在地の景観と外来の景観の複雑な関係を編む領域として存立し、時間の経過とともに、破壊、遺棄、衝突、協商など各種の状況を通して、新たな景観を生産し、また不断に改変する。

本稿は、以上の問題意識にたち、鉱山に関わるアクターの空間的実践を通して、支配者と被支配者の空間的諸関係を明らかにし、金瓜石鉱山と瑞芳鉱山の文化遺産としての価値を再度議論するために知見

を提供するものである。

キーワード：文化的景観、動態性、空間的实践、空間的表象

Abstract

What should we value at the Jinguashi Mining Sites as one of cultural heritage? Does it value as a progressive of mining development? This seems to be correct. In fact, since the large-scale developments with the Tanaka-Office and the Fujita-Gumi were carried out, the amount of production always planned to enlarge.

It merely explains regarding the mines as one of development targets, however, it is far from the actual situation of the mines as the cultural landscape, which should include the community suddenly constructed by Japanese, the old settlement lived by the ruled and its reorganization, and also people.

Invasion of a heterogeneous element in some space makes the newly territory where interactions between different cultures such as collisions and fusions are induced. This situation states as the territory

1 この点に関して、虎尾科技大学の黄士哲教授の教示によるところが大きい。記して感謝いたします。

where organizes complicated relations between existence landscape and foreign one. Through the various situations such as destruction, abandonment, collision and agreement, a new landscape will be produced and alter constantly.

The paper is to clarify spatial relations between the rule and the ruled through spatial practices by the actors regarding mining activities, and to offer knowledge to argue the value as a cultural heritage again.

Keywords: Cultural Landscape, Dynamism, Spatial Practices, Representation

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

金瓜石鉱山や瑞芳鉱山の文化遺産としての価値は、どのようなものか。それは、文化部文化資産局がいうように、鉱山開発の発展的側面にあるのか。それは一面的には正しい。事実、田中事務所や藤田組による大規模な開発が行われて以来、常に生産量の増大化が進められてきた。特に、日本統治時代の金瓜石鉱山は、佐渡金山を生産量で凌ぐ、東アジア有数の金山とされた。

しかしそれは、産業としての鉱山に関する説明に過ぎず、唐突に出現する鉱山町を中心とする地域社会と、被支配的な物的環境に変貌した旧来の地域社会およびその再編に関する議論を含んでおらず、文化的景観としての鉱山の実態把握からはほど遠い。

本来、ある空間における異質な要素の進入は、

異文化間の衝突や融合などの相互作用を惹起する領域を新たに出現させる。そしてそれは、在地の景観と外来の景観の複雑な関係を編む領域として存立し、時間の経過とともに、破壊、遺棄、衝突、協商など各種の状況を通して、新たな景観を生産し、また不断に改変する。だから、景観の価値は、進歩史観的な説明では片付けられない。

こうした景観そのものの生産性や動態性を考える視座は、多様な行為主体の存在と相互の関係を明らかにすることに他ならない。すなわち、景観に内／外在する人々や何らかの関連するモノ／コトは景観に自らの空間的实践を寄託する。そして、同時にそれらの実践の相互作用が、景観の空間性を再編すると考える。そこにみられる動態性は、一方で景観の物理的側面に偏った認識を乗り越える視座であり、他方で多様な実践が常に「景観的」であるという視点の介在により実践の空間性を同時に明らかにするための視座であるといえる。別言すれば、多様な要素で構成されている景観における、可視／不可視、有形／無形などの二元論的視座を乗り越える方法でもあり、全体論的視座の獲得でもある。本稿は、金瓜石鉱山の景観を行為主体として、そこで織りなされてきた日常の実践や社会的・政治的实践をみつめ、鉱山景観の形成メカニズムとその価値を考察するものである。

2. 金瓜石鉱山の開発略史

金瓜石・九份一帯における社会的環境は清朝後期になってはじめて出現したとされる。金瓜石においては、光緒年間(1875～1908)に、人々が中国特有の建築様式である三合院の住居を建て、水田を整備し、さらに土地公廟を設置していたという(中華民国自然歩道協會, 2005: 30-31)。また九份における人々

の生活は 1840 年代頃からみられるらしく、少数ながら水田が広がる地域であったという(台北市古風史蹟協會, 1994: 13)。

その後、農業景観がひろがるこの一帯が鉱山へと変貌していく契機は、19 世紀末に起こる。1884(光緒 10)年に清朝政府によって台湾巡撫に任命された劉銘伝(1836 ~ 1896)が台湾北東部において基隆と台北を結ぶ鉄道の建設に取りかかった時のことである。

1890(光緒 16)年、土木作業に従事していた人が基隆河のなかに砂金を発見した。この事件に沸き立つ人々が砂金を求めてさらに上流へ遡っていくと、翌年には九份に金脈の露頭が見つかった。それ以来、砂金採取や金鉱採掘を行う人々が九份に大量に押し寄せた。そこで、清朝政府は金砂局を設立し、その管理にあたった(唐羽, 1985: 74-88)。その際、鑑牌制を用い、²採取や採掘にあたる人々から鑑札料を徴収した。しかし、その収入に対して職員の雇用にかかる経費が膨大であったことから、1893(光緒 19)年 1 月から翌年 6 月の期間に民間業者による運営に移転することを決定し、5 つの業者に採取を委ねた。しかし、その直後から業者が得た利益が膨らみ、さらに 1894(光緒 20)年に金瓜石、大粗坑、小粗坑にも金の鉱脈が発見されたことから、清朝政府は同年 6 月以降、一帯を再び同政府の管轄下においた。そして、瑞芳に金砂総局、九份山を含む 4 カ所に支局を設置し(臺灣鑛業會報, 1925: 34-37)、政府管理のもと山河の利用を進めることになった。

しかし、日清戦争の結果、下関条約によって、台湾は、清国から日本に割譲された。直ぐさま、日本は、

台湾総督府(以下、総督府と略す)を設置し統治を開始した。日本による植民地支配は、産業化を志向していたとされる。台湾においても多様な産業の開発が進められた。そのひとつに鉱山開発があった。ところが、植民地統治開始直後の台湾の社会情勢は混乱し、清朝政府が設置した金砂局は機能不全に陥っており、盗掘が相次いだ。そこで総督府は、「砂金取締規則」と「鑛業規則」を 1895(明治 28)年に発布し、台湾人に対する暫定的な採掘制限をかけた。

しかしそれでも、金瓜石と九份における盗掘はおさまらず、総督府は翌年、強制的に山を封鎖し、採掘を禁止した(金瓜石鑛山田中事務所, 1916: 2)。そして、総督府は技師に対して、有望な鉱脈の有無、開発の可能性、将来計画のあり方を明確化するための調査を命じた。そして、現地派遣された石井八萬次郎は、技手の西村三木雄などとともに金瓜石山や九份山を測量調査し、両山に有望な鉱脈が複数存在することを確認した(石井, 1896a)。その上で、石井は、地形や鉱脈の位置、施設の配置を考慮して、経済利益および作業効率の観点から、両山を一体的に開発する方法を示し(石井, 1896b)、同時に、溪流が合流する傾斜が緩やかな場所に鉱業施設を配置する提案をした(石井, 1896a)。さらに海岸に位置する煥子寮と水滝洞に、船着きと倉庫を建設することにも言及した。³

このような合理的な空間計画はいかにして可能であったのか。これについては、西村の報告にうかがうことができる。西村は鉱山施設の立地として、「目下水田ノ場所最モ適當」とし、さらに「建設スル場所ニハ苦マス(中略)一萬坪余ノ平地アリ該地ハ支那人金瓜石街ヲ建設セシ処ニシテ之レ亦應用シ得ベキ」と述

2 鑑牌制とは、採取や採掘にあたる人々にその許可を与える一方で、鑑札料を徴収するものである。藤田組は、台湾人による盗掘に対応するために、この制度を後に援用することになる。
3 総督府技師の開発構想については、波多野(2015: 50-70)を参照。

べる(西村, 1896)。すなわち、新たな統治者として、既存の水田や住居およびそれらの土地が収奪の対象であると考え、機能的かつ合理的に土地を利用するという思考が、石井らの壮大な開発構想を支えていたのである。

さて、総督府技師らによる現地調査の結果報告を受けた総督府は、金瓜石・九份一帯の鉱区を2つにわけ、基隆山より東側の鉱業権を田中長兵衛率いる田中事務所、西側の鉱業権を藤田伝三郎の藤田組に許可した。そして田中事務所は自らの鉱区を金瓜石鉱山、藤田組は瑞芳鉱山と名付け、開発を開始した。ともに1897(明治30)年のことである。

その後、田中事務所と藤田組はともに、組織の役員(開発、事務)、鉱夫などの労働者、および家族をそれぞれの鉱山に動員した。さらに金瓜石鉱山においては、田中事務所自ら「飯場」を設置していたことが知られており、飯場頭や渡り鉱夫の存在もうかがうことができる。

日本から移動してきたのは、なにも組織やそれに関わる日本人ばかりではない。採掘、選鉱、製錬等の鉱山技術、土地を造成するための土木技術、工場、事務所、住居、その他の施設を建設するための建築技術、その建築がもつ形、神社や祭りなどの生活文化など、移動してきたモノ/コトは、日々のすべてにおよぶ。別言すれば、鉱山開発に伴い、日本的な産業技術や文化が地理空間に敷衍していくことは、台湾的農村集落やゴールドラッシュの景観を日本的な空間に書き換える作業に他ならない。

そのなかで田中事務所は、まず金瓜石本山露頭付近で、割譲前に台湾人が掘削していた坑道を再

利用し、同時に事務所や住居を建設し、鉱山事業を開始した。その後、1900(明治33)年ころから、露頭より北に降ったより平坦な土地に製錬所を建設し始め、1907(明治40)年前後までに多数の製錬所の他、各種工場、事務所、住居、病院、警察派出所、小学校などを建設し、近代的鉱山町を整備した。さらに水涵洞にも、溶鉱製錬所、発電所、住居などを建設し、ここにも鉱山町を整備した。その一方で、鉱山会社のもとで働くことを求める台湾人は、田中事務所の鉱山町の片隅に集落を形成した。

藤田組は1897(明治30)年、九份に事務所と小規模の製錬所(現在の九份国民小學の敷地)を設置し事業を開始した。しかし、事業開始直後から、現地に居住しようとする台湾人の一部が、施設への放火や盗掘などの政治行動を起こしたことで、藤田組は九份における鉱山町の整備や鉱山事業そのものを進めることができず、鉱業権を地区ごとに分割し、次第に顔雲年などの現地の有力者にその権利を貸与していく。その結果、瑞芳鉱山では、九份一帯に複数の台湾人集落が再編成されることになった。そして藤田組自らは1903(明治36)年、煥子寮に大型製錬所、住居、警察、病院などを配置した鉱山町を整備した(島根県教育委員会, 2017)。

また1899(明治32)年、木村久太郎の木村組が、金瓜石山の南側に位置する牡丹山を中心とした武丹坑鉱山の事業を開始した。同鉱山は明治30年代、40年代を通じて比較的豊富な金産出量を誇り、金瓜石鉱山、瑞芳鉱山とともに、「三金山」と新聞等で報道された。しかし1912(明治45)年を境に産出量が激減したため(野村愛正, 1938)、木村は1913(大正2)年、その鉱業権を田中事務所に譲渡した。⁴

4 田中事務所も武丹坑鉱山の開発を試みるが、思うように生産量を上げることができず、1918年に撤退した。

以上、金瓜石鉱山における田中事務所による開発の概略を述べた。これを踏まえると、田中事務所と金瓜石鉱山の関わりは、「割譲直前」(1890年代)「総督府による構想段階」(1895～1896)「台湾鑛業規則の公布から田中事務所による開発の初期まで」(1897～1899)「大規模開発以降」(1900～1907)の4つの時期に区分することができる。

3. 金瓜石鉱山に関わる要素の変遷

次に、前節で明確化した時期区分に基づき、各時期における金瓜石鉱山に関わる要素とその関係性、さらに変遷についてみていく。

金瓜石鉱山およびその周辺における開発過程に関わったアクターを列記すると、表1の通りとなる。ここでのアクターは、金瓜石鉱山の利害に関連する組織や人々のみならず、地理的要素や施設を含む。地理的要素、施設、ステークホルダーはさらに表1の分類[2]の通り分けられ、さらに個々の要素が分類[3]として列挙される。これらの要素が、時代ごとにどのような関係にあったかを図化したのが、図1である。以下、ステークホルダーの立場から、多様なアクターとの関係をみていく。

まず「割譲直前」において存在するステークホルダーは、(51)清朝政府、(59)台湾人鉱山労働者、(60)台湾人農業従事者、の3者である。清朝後期に漢人が移り住み、農村集落を形成していた。その後、砂金や金鉱の発見により、多くの台湾人がそれらを求め、金瓜石および九份に押し寄せた。その結果、清朝政府が金砂局を設置した上で、鑑牌制を導入し、鉱山資源を自らの管理下に置いた。それにより、台湾人鉱

【表1】金瓜石鉱山に関わるアクター一覧

分類[1]	分類[2]	分類[3]		
地理	自然地形	1	山(金鉱山)	金瓜石山
		2		九份山
		3		武丹山
		4	河川(砂金)	外九份溪
		5		金瓜石溪
		6		内九份溪
		7		大竿林溪
		8		牡丹溪
	土地	9	農地	
		10	台湾人居住地	
		11	鉱業用地	
	隣接鉱山	12	日本人居住地	
		13	瑞芳鉱山	
	日本の関連鉱山	14	武丹坑鉱山	
		15	釜石鉱山	
		16	佐賀関	
		17	日立	
		18	大森鉱山	
施設	鉱業施設	19	坑道	
		20	製錬所	第一製錬所
		21		第二製錬所
		22		第三製錬所
		23		第四製錬所
		24		第五製錬所
		25		溶鉱製錬所
		26		武丹坑第一製錬所
		27		武丹坑第二製錬所
		28	発電所	水力発電所
		29		武丹坑発電所
		30	運搬関連施設	軽便鉄軌道
		31		架空鉄索
	32		停車場	
	生活関連施設	33	鉱業事務所	
		34	役員住宅	
		35	職工住宅	
		36	飯場	
		37	茅葺住居(台湾人)	
		38	尋常高等小学校	
		39	公学校	
		40	病院	
		41	警察派出所	
		42	郵便通信局	
		43	山神社(金瓜石神社)	
		44	浄土宗布教所	
		45	倶楽部	
		46	酒保	
		47	廟	金福宮
		48		慶福宮
		49		福興宮
	50		勸濟堂	
	ステークホルダー	政府	51	清朝政府
52			台湾総督府	鉱務課
鉱山会社		53	田中事務所	
		54	藤田組	
		55	木村組	
人		56	日本人鉱山会社社員	
		57	日本人鉱山労働者(雇用)	
		58	日本人鉱山労働者(飯場)	
		59	台湾人鉱山労働者	
		60	台湾人農業従事者	
		61	中国人鉱山労働者	

山労働者は清朝政府の経済的支配下に置かれることになった。すなわち、同時代の金瓜石は農村集落

と砂金／金鉱を求める原初的鉱山集落が共存していた。農村集落の土地公廟として設置され、後に「金福宮」となる廟の存在がその共存状態を示している。

次に、「総督府による構想段階」において存在するステークホルダーは、(52)台湾総督府と(60)台湾人農業従事者、の2者である。この段階において、(59)台湾人鉱山労働者は排除され、原初的鉱山集落は廃墟化していた。この段階において、総督府の技師は先にみたように、金瓜石と九份を一体的に開発する壮大な構想を描いており、(60)台湾人農業従事者が使用する農地一帯に鉱業施設を建設することを期待していた。そのため、(52)台湾総督府は、(60)台湾人農業従事者の存在を排除し、彼等が使用していた土地を鉱業用地に包摂することを狙っていたと考えられる。台湾人の排除と、収奪による土地の包摂が、この時期のキーワードとなる。

次いで、「台湾鑛業規則の公布から田中事務所による開発の初期まで」は、総督府の技師が構想していた計画と2つの点で大きくことなる。第1に、金瓜石と九份は分割され、異なる鉱山会社に鉱業権が与えられたことである。これにより、特に九份の鉱業権を得た(54)藤田組は、総督府技師の構想とは異なる鉱山町を開発することになった。第2に、(60)台湾人農業従事者を段階的に排除する一方で(波多野, 2015)、戻ってきた(59)台湾人鉱山労働者をむしろ包摂する方法を金瓜石鉱山、瑞芳鉱山ともに採用した点である。金瓜石鉱山においては、(59)台湾人鉱山労働者を苦力などとして活用すると同時に、限られた土地における砂金採取を認めた。その結果、田中事務所が重点的に開発していた露頭付近には台湾人居住域が発生し、併せて彼等の信仰対象として、(50)勸濟堂の前身が設置された。これらの動向により、日本人による鉱山開発地区および居住区と台湾人の活

動域は必ずしも明確に分離されない状態になった。

またこの時期において、金瓜石鉱山の南側に武丹坑鉱山が生まれ、瑞芳鉱山とともに、3つの鉱山が鼎立する状況となった。

「大規模開発以降」の時期において、金瓜石鉱山内におけるステークホルダーは完全に(53)田中事務所に包摂されることになる。すなわち、農地等の利用に関する不平等な契約を通じて(波多野, 2015)、(60)台湾人農業従事者は当地における農業活動から撤退せざるを得ず、他方で(59)台湾人鉱山労働者は有力な台湾人を介して(53)田中事務所に包摂されていく。(53)田中事務所は、露頭付近を離れ、農地が広がっていた土地に、複数の鉱業施設や生活関連施設を建設した。その際、(53)田中事務所は、(59)台湾人鉱山労働者に対して、工場地帯近くの急峻な土地に限って彼等の居住(住居建設)を許可した。これにより、(10)台湾人居住地が(53)田中事務所の意向に統合されたことにある。それに合わせて、露頭付近に設置されていた(50)勸濟堂も、新たな台湾人居住地に移転される。その結果、台湾人の定住化が進み、さらに多くの廟が建設される事態となった。それは、台湾人による日本の近代の許容を通した主体的統合階において存在するステークホルダーは、(52)台湾総督府と(60)台湾人農業従事者、の2者である。この段階において、(59)台湾人鉱山労働者は排除され、原初的鉱山集落は廃墟化していた。この段階において、総督府の技師は先にみたように、金瓜石と九份を一体的に開発する壮大な構想を描いており、(60)台湾人農業従事者が使用する農地一帯に鉱業施設を建設することを期待していた。そのため、(52)台湾総督府は、(60)台湾人農業従事者の存在を排除し、彼等が使用していた土地を鉱業用地に包摂することを

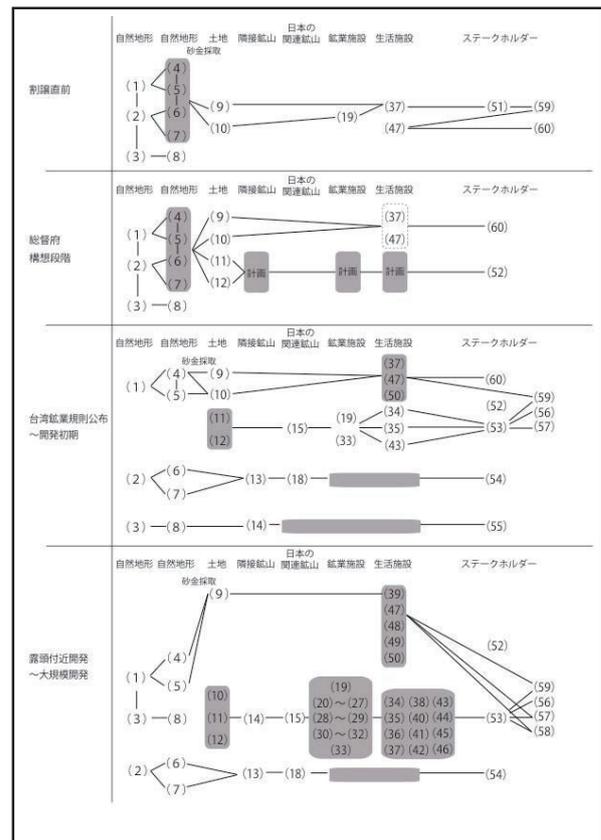
狙っていたと考えられる。台湾人の排除と、収奪による土地の包摂が、この時期のキーワードとなる。

次いで、「台湾鑛業規則の公布から田中事務所による開発の初期まで」は、総督府の技師が構想していた計画と2つの点で大きくことなる。第1に、金瓜石と九份は分割され、異なる鉱山会社に鉱業権が与えられたことである。これにより、特に九份の鉱業権を得た(54)藤田組は、総督府技師の構想とは異なる鉱山町を開発することになった。第2に、(60)台湾人農業従事者を段階的に排除する一方で(波多野, 2015)、戻ってきた(59)台湾人鉱山労働者をむしろ包摂する方法を金瓜石鉱山、瑞芳鉱山ともに採用した点である。金瓜石鉱山においては、(59)台湾人鉱山労働者を苦力などとして活用すると同時に、限られた土地における砂金採取を認めた。その結果、田中事務所が重点的に開発していた露頭付近には台湾人居住域が発生し、併せて彼等の信仰対象として、(50)勸濟堂の前身が設置された。これらの動向により、日本人による鉱山開発地区および居住区と台湾人の活動域は必ずしも明確に分離されない状態になった。

またこの時期において、金瓜石鉱山の南側に武丹坑鉱山が生まれ、瑞芳鉱山とともに、3つの鉱山が鼎立する状況となった。

「大規模開発以降」の時期において、金瓜石鉱山内におけるステークホルダーは完全に(53)田中事務所に包摂されることになる。すなわち、農地等の利用に関する不平等な契約を通じて(波多野, 2015)、(60)台湾人農業従事者は当地における農業活動から撤退せざるを得ず、他方で(59)台湾人鉱山労働者は有力な台湾人を介して(53)田中事務所に包摂されていく。(53)田中事務所は、露頭付近を離れ、農地が

広がっていた土地に、複数の鉱業施設や生活関連施設を建設した。その際、(53)田中事務所は、(59)台湾人鉱山労働者に対して、工場地帯近くの急峻な土地に限って彼等の居住(住居建設)を許可した。これにより、(10)台湾人居住地が(53)田中事務所の意向に統合されたことにある。それに合わせて、露頭付近に設置されていた(50)勸濟堂も、新たな台湾人居



【図1】金瓜石鉱山開発各時期におけるアクター間の関係性

住地に移転される。その結果、台湾人の定住化が進み、さらに多くの廟が建設される事態となった。それは、台湾人による日本の近代の許容を通じた主体的統合と⁵、他方で儒教文化の温存が図られたことを意味する。

さらにこの時期に、(53)田中事務所が飯場を設

5 「主体的統合」とは、被支配者が単に従属的に統合されるのではなく、自らの生活拠点を確保するための「戦術」的統合を意味する。

置していたことが判明している。こ

れは(53)田中事務所みずからが飯場制度を導入していたことの表れであり、その制度下にある飯場頭や渡り鉱夫の存在可能性が指摘できる。これにより、台湾人の定住化、(53)田中事務所の直接的配下にいる人々の定住、渡り鉱夫らによる流動性が複雑に関係しあう状況にあったといえる。

この時、(57)日本人鉱山労働者(雇用)や(58)日本人鉱山労働者(飯場)の日常生活にとって重要な役割を果たしていたのが、(10)台湾人居住地であった。同居住地が徐々に整備されていき、なかには食事をする場所、雑貨店、遊技場などがあった。他方で田中事務所が設けていた生活関連施設は、学校、病院、警察、宗教施設以外に、酒保と呼ばれる雑貨を扱う店舗と倶楽部のみであった。そのため、多くの労働者はよりよい日常生活を求め、(10)台湾人居住地を利用した。

4. 金瓜石鉱山を巡る言説の析出

他方で、金瓜石鉱山や、瑞芳鉱山はどのように表象されていたであろうか。

鉱山の表象性を明らかにし得る資料として、田中事務所自らが発行した写真集、台湾日日新報をはじめとする新聞報道、鉱業会の会報である『臺灣鑛業會報』『日本鑛業會誌』、総督府技師や技手による視察報告、さらに主に総督府鉄道部が編纂・発行した旅行案内があげられる。

田中事務所は、『臺灣金瓜石田中鑛山全景』

(1903年)『金瓜石鑛山寫真帖』(1913年)の2冊の写真集を発行していたことが知られる。前者は露頭での開発を開始し、その後露頭よりも下部の土地で複数の製錬所を建設し始めた時期に発行されたものである。後者は、製錬所のみならず、多様な工場施設、架空索道、事務所、住居、病院、警察、郵便局、神社などの整備が一段落し、鉱山町としての体裁が整った時期のものである。いずれの写真集も、各施設の写真と施設名称が掲載されているのみで、文章による紹介や説明を含まない。

台湾日日新報等による新聞報道は、多数存在する。先述の通り、産業化を志向していた植民地統治にあつて、鉱山開発が重要な国家的事業であったことが窺える。報道の内容も多岐にわたっているが、主に、産出量、開発の状況、将来計画など産業の実態を伝える記事と、盗掘・盗難や火事などの被害状況を伝える記事に大別される。いずれの記事も状況報道の域に留まる。

『臺灣鑛業會報』『日本鑛業會誌』や、総督府技師や技手による視察報告は、さらに詳細に現状を報告するものである。それらの報告のなかには、総督府技師による苦言が含まれていたものの、⁶それもあくまでも開発方針に対するものであった。

このように、鉱山の内部および周辺から発信されるイメージや言説は、鉱山開発の状況に限定されていた。それに対して、鉱山を外側から捉えたであろう資料として、旅行案内書が挙げられる。当時、金瓜石鉱山は、多くの旅行案内書で紹介されていた。金瓜石鉱山、瑞芳鉱山、およびこれらに関連する記述がある旅行案内書は、管見の限り、表2の13点を数える。

6 田中事務所は、採掘を積極的に実施し、事業の拡張を積極的に進めていた、その姿勢に対して、総督府技師は、「金瓜石ノ採掘法ヲ一見スルニ専ラ採鑛ニ熱中シテ探鑛ヲ等閑ニ付スルモノトノ評ヲ免レザルガ如シ」と批判していた(齋藤精一, 1897: 298)。

そのうち、1908(明治41)年に臺灣總督府鉄道部が編集・発行した『臺灣鐵道名所案内』は台湾で発行された旅行案内書としては最も古いもので、鐵道部が断続的に発行する案内書の原型となったとされる(曾山毅, 2003: 184)。同書を見ると、瑞芳鉦山に関する詳細の記述がなされており、藤田組が煥子寮に建設した大規模製鍊所と施設群がつくりだす圧倒的な景観を伝えている。一方で、金瓜石鉦山と武丹坑鉦山については名称の記載はあるものの、各々に関する記

述はなく、3つの金山が鼎立している状況を世界に例を見ないと評価している。それが、1923(大正12)年に発行された『鐵道旅行案内』以降になると、状況が一変する。同書以降、瑞芳鉦山と金瓜石鉦山の両者に対して記述をするようになるが、瑞芳鉦山に関しては徐々に記述が減少していく。1918(大正7)年に藤田組は、顔雲年に対して一切の鉦業権と所有する設備を3万円で売却した。そして顔雲年は臺陽鑛業株式會社を設立し瑞芳鉦山の運営に取りかかるが、そ

【表2】旅行案内書に記載された金瓜石鉦山および周辺鉦山に関する内容

書名	出版年	編者/著者	地名	説明
臺灣鐵道名所案内	1908年	台湾總督府鐵道部	瑞芳鉦山	數百の工場及家屋は階段を成して山下に連り精煉場の建築物は煥子寮灣を壓して風光爲めに一段の雄を加ふるを見る(後略)
			三金山	三金山相連り互に競ふて新式を採用し電氣、水力、蒸氣力に依り精巧なり機械を運轉し架空鐵索、馬車鐵道、電燈、水道の工事成り壯觀真に驚くに足るものあり其の他郵便電信局、小學校、病院、警官派出所、鑛民俱樂部等各種必要の機關を具備す。聞く如く大鑛山相鼎立し其の産額の多量なる世界多く其比を見ざる所なりと云ふ。
臺灣鐵道案内	1912年	台湾總督府鐵道部	瑞芳鉦山	數十棟の工場及家屋は階段を成して山下に連り精煉場の建築物は煥子寮灣を壓して建てり。
			三金山	三金山相連り互に競ふて新式を採用し電氣、水力、蒸氣に依り精巧なり機械を運轉し、架空鐵索、馬車鐵道、電燈、水道等の機關悉く具備す。其の他郵便電信局、小學校、病院、警官派出所、鑛民俱樂部等の設けあり、(中略)大鑛山相鼎立し其の産額の多量なるは世界多く其の比を見ざる所なりと謂ふ。
臺灣視察手引き	1916年	杉浦和作	三金山	基隆より約二里基隆堡及び三貂堡あり一金瓜石、一を牡丹坑、一を瑞芳と呼び金瓜石は日本第一の金山にして牡丹坑と共に田中組の經營に依り瑞芳は藤田組の經營に係る
鐵道旅行案内	1923年	台湾總督府鐵道部	瑞芳金山	停車場より北東一里、九份庄にあり、現に臺陽鑛業株式會社の經營に依り最近時局の影響を蒙り事業を縮小したりと雖も尙大正九年の産額二十二万九千圓に達せり
			金瓜石鑛山	停車場より北東一里三十丁、田中組の經營する處にして、大正三年武丹坑鑛山を併せ、其面積二百四十萬七千六百坪に及び、諸般の設備の宏大なると産額の多きとは内地鑛山に比し、敢て遜色など、最近年産額、金、銀、銅及金銅鑛を合し、其價格百十六萬三千餘圓なり
臺灣鐵道旅行案内	1924年	台湾總督府鐵道部	瑞芳驛	瑞芳庄は、(中略)瑞芳・金瓜石の金山を以て有名である。
			瑞芳金山	大字九份に在る。限に臺陽鑛業會社が經營してあるが、最近勞銀の昂騰に因り、採算合はず、事業の縮小するに止むなきに至つた。
			金瓜石金山	田中組の經營に係り、附近の武丹坑金山を併せ、鑛區面積二百四十萬餘坪に達し、其の規模の宏大なる、其の産額の多量なる、本邦屈指の金山である。最近の年産額は金・銀・銅及び金鑛・銅鑛を合し其の價格百十二萬八千七百餘圓に達してある。
臺灣鐵道旅行案内	1927年	台湾總督府鐵道部	瑞芳驛	瑞芳庄は、(中略)瑞芳・金瓜石の金山を以て有名である。
			瑞芳金山	大字九份に在る。限に臺陽鑛業會社が經營してあるが、最近勞銀の昂騰に因り、採算合はず、事業の縮小するに止むなきに至つた。
			金瓜石金山	金瓜石鑛山株式會社の經營に係り、附近の武丹坑金山を併せ鑛區面積二百四十萬餘坪に達し、其の規模の宏大なる、其の産額の多量なる、本邦屈指の金山であるが大正十二年以降金銅鑛の乾式製鍊を廢して之れを内地に賣却するに及んで甚だしく産額を減退した。最近の年産額は金・銀・銅及び金鑛・銅鑛を合し其の價格九十九萬二千餘圓に達してある。
臺灣鐵道旅行案内	1930年	台湾總督府鐵道部	瑞芳金山	大字九份に在る。臺陽鑛業會社が經營してある。
			金瓜石金山	金瓜石鑛山株式會社の經營に係り、附近の武丹坑金山を併せ鑛區面積二百四十萬餘坪に達し、其の規模の宏大なる、其の産額の多量なる、本邦屈指の金山であるが大正十二年以降金銅鑛の乾式製鍊を廢して之れを内地に賣却するに及んで甚だしく産額を減退した。昭和三年の産額は金・銀・銅及び金鑛・銅鑛を合し其の價格二百三十萬圓に達してある。
臺灣鐵道旅行案内	1932年	台湾總督府鐵道部	瑞芳金山	大字九份に在る。臺陽鑛業會社が經營してある
			金瓜石金山	金瓜石鑛山株式會社の經營に係り、附近の武丹坑金山を併せ鑛區面積二百四十萬餘坪に達し、其の規模の宏大なる、其の産額の多量なる、本邦屈指の金山であるが大正十二年以降金銅鑛の乾式製鍊を廢して之れを内地に賣却するに及んで甚だしく産額を減退した。昭和五年の産額は金・銀・銅及び金鑛・銅鑛を合し其の價格四百六十一萬圓に達してある。
臺灣鐵道旅行案内	1934年	ジャパン・ツーリスト・ビューロー台北支部	瑞芳金山	(東北軒九)九份にある
			金瓜石金山	(東南七軒二)臺陽鑛業株式會社の經營で鑛區面積五二一萬坪、昭和七年度の産額金塊六〇・四〇八匁、銀塊一一・五・六五一匁其他金銅鑛、沈澱銅等約三五八萬圓に達してある
臺日ハイキングコース	1937年	臺灣日日新報	金瓜石コース	九份と金瓜石とは基隆山を界にして、西と東前者は舊式で而も有利な採取法、後者は新式科學的大工場は偉觀である。 注意 要塞地帯に付き撮影模写寫等せざること
台湾觀光の葉	1939年	台湾總督府鐵道部	金瓜石金山	日本鑛業株式會社の經營で鑛區面積五二一萬坪、昭和一二年度の産額金、銀、銅鑛其の他を合せ二・七万匁、金額一、四三九万餘円。
臺灣觀光の葉	1940年	台湾總督府鐵道部	金瓜石金山	日本鑛業株式會社の經營で鑛區面積五二一萬坪、昭和一二年度の産額金、銀、銅鑛其の他を合せ二・七万匁、金額一、四三九万餘円。
臺灣鐵道旅行案内	1942年	台湾總督府鐵道部	瑞芳驛	主なる建物 街役場、信用組合、基隆郡警察課分室、基隆炭礦瑞芳坑、台陽鑛業瑞芳坑、台陽鑛業瑞芳鑛業所、日本鑛業金瓜石鑛業所。 旅館 瑞芳鑛山ホテル(九份にあり)駅より七軒 八室 一・五一三円) 金瓜石鑛山ホテル(金瓜石にあり)駅より七軒 八室 一・五一三円) 劇場 瑞芳座 昇平座
			瑞芳金山	(名称のみ)
			金瓜石鑛山	日本鑛業株式會社の經營

の際、煇子寮の残された製錬所やその他の施設は廃棄された。これは、顔雲年の開発方針が旧式の方法を採用することであり、近代的な方法によって製錬等を行うことを放棄したためである。その結果、鐵道部が評価していた景観が消滅することとなった。また煇子寮の施設を廃棄した瑞芳鉱山は、1918(大正7)年から昭和初期まで産出高が減少の傾向にあり、旅行案内書にも関わらず、事業の縮小について説明がされていた。さらに昭和初期以降、瑞芳鉱山に関する説明は立地と企業名のみとなり、1942(昭和17)年には鉱山名称の記載に留まることとなった。

その一方で、金瓜石鉱山に関する記述は、1923(大正12)年以降、鉱区の面積、多数の施設が広範囲に及んで配置されていること、そして産出額が大きいたことが中心となっており、1924(大正13)年に鐵道部が発行した『臺灣鐵道旅行案内』では「本邦屈指の金山」と評価した。金瓜石鉱山においても、1923(大正12)年に乾式製錬を廃止したことで、産出量が減少したことが昭和初期以降に発行された『臺灣鐵道旅行案内』3点(昭和2年、昭和5年、昭和7年)で追記されている。しかし昭和10年代においても、企業名、鉱区面積、産出量に関する記述は継続しており、瑞芳鉱山に比し重要視されていたことがうかがえる。

このように、鉱山の表象に寄与するものは多岐にわたるが、それが人々を誘致するための観光関連書籍であっても、その内容は殖産興業や富国強兵の喧伝を中心としており、その域をでるものは皆無であった。

5. 金瓜石鉱山にみる景観形成のメカニズム

以上の議論から、金瓜石鉱山の景観形成には、以下の3点が関わっていることがわかる。

- ① 理想的鉱山の建設
- ② 鉱山形成の空間的实践
- ③ 鉱山の表象性

①は、総督府による現地調査を経て提示された理想的な鉱山の姿があり、それに対する田中事務所の戦略的依存である。

②は、①の理想を掲げ、台湾人の排除に動いたものの、結果として、日本人と台湾人は非分離の状態となり、さらに両者は統合されながらも、廟の建設など台湾文化が拡張していく状況である。

③は、鉱山の表象的次元である。鉱夫や台湾人による言語表象がまったくない一方で、田中事務所、新聞、会報、総督府の視察報告を通して形成される表象は、あくまでも産業としての鉱山開発を状況説明に終始していた。さらにより場所の魅力を説明すると一般には考えられる旅行案内書においても、企業名、鉱区面積、産出量を記載し読者に理解を促すのが常であり、ここで伝えるべき事柄も、殖産興業の範囲内に収まるものでしかなかった。

次に、これら3点がいかに関係しあっているかをみていく。

①-②

景観形成の本質が、空間実践を通して変容していることがわかる。まず第1の段階において、総督府と鉱山会社は、台湾人に対する強権を通して、理想的な鉱山の建設を目論んだ。ここでいう理想的な鉱山とは、近代的かつ合理的で、空間を最大限に活かし

た鉱山であった。それは、総督府と鉱山会社にとっては、新たに獲得した植民地だからこそ可能であった。その支配者意識は、総督府技師や技手の報告内容に如実に示されていた。しかし第2の段階において、砂金採取や金鉱採掘を求め金瓜石や九份に残る台湾人による砂金採取および居住を限定的に認めることで、植民地鉱山の特有性がむしろ発生することになった。それは廟が増加していく状況にも示されており、田中事務所からすれば台湾人と協調関係を構築することで、より円滑な鉱山運営が見込まれたし、また台湾人からすれば金瓜石鉱山内における一定の権利の獲得を達成したことになる。

①—③

言説は、植民地における鉱山建設の公正性を強化する役割を果たしていると考えられる。ここでいう公正性とはあくまでも総督府や田中事務所にとってのものであり、鉱山開発の重要性と必要性が、開発実態の表明によって訴えられる。それは日本的な鉱山自体が台湾人に対する「日本」(＝近代化)の表象として機能し得ており、また台湾人による日本的近代の受容に役割を果たしていた可能性が指摘できる。

②—③

上記のような理想的鉱山を建設したいと願い総督府や田中事務所と、言説による鉱山開発の積極的喧伝(＝表象化)が相互に強化しあう関係にあったのに対して、鉱山建設の経験的・実践的過程は、言説とは異なる空間を現出させた。それは、端的に言えば、台湾人による近代の受容と、日本人による台湾的生活の受容、であった。前者は、総督府や田中事務所の排他的態度に対して政治行動を起こすことで、台湾に人々は自らの権利を獲得し、居住の持続性を確保したことを指す。それは単に日本の組織に従属するこ

とによる獲得という単純な構図ではなく、日本的近代を彼らなりに「戦術」的に受容した結果である。後者は、台湾人との共存に開発の円滑化をみた田中事務所が、廟に代表される儒教文化を許容することの必要性を考えたことを指す。当初排他性を志向していた田中事務所が台湾人に対して、廟の建設、さらには住居の建設を認めることで、植民地の特有の鉱山景観が形成された。こうした特有性は、盛んに喧伝された発展的鉱山の実態とは異なる様相を示していた。

6. 結論

金瓜石鉱山の実態は、整備された鉱業施設、鉱業技術の進歩、そして施設や技術を通して産出された鉱石の量によってのみ示されるものではない。それは鉱山の一側面には違いない。しかし鉱山は、製品を生み出す工場とは異なり、社会生活の場としても機能している。だから人々の観念や価値観が違えば、破壊的行為や、より強かな政治的行動などが起こり、景観の形成に大きな影響を及ぼす。そのため、景観形成のメカニズムは、坑道、選鉱所、製錬所、輸送路などの鉱業に直接的に関与する施設する際の合理的な態度のよって説明がつくものではなく、むしろステークホルダー間に惹起する多様な行為が景観形成の過程において重要な枠割りを果たしており、その行為の出現にしたがって柔軟に形成方針を変更していくことが景観のダイナミズムであると考えられる。

常に監視の目が向けられていることに十分留意しなくてはならないということである。世界遺産であるなしに関わらず、すべての文化遺産は地域の人々が守り伝えてきた大切な存在であることに間違いはない。しかし、世界遺産は地域の人々のみならず、世界中の人々にとっても大切な宝物なのであるから、私たちには世界の人々に対して、それを確実に守るという義務が生じたわけである。

【参考文献】

1. 石井八萬次郎「瑞芳金山視察要報」(石井八萬次郎他『鑛山視察復命書』(國史館臺灣文獻館所藏)、1896a)
2. 石井八萬次郎「鑛山視察報告」(石井八萬次郎他『鑛山視察復命書』(國史館臺灣文獻館所藏)1896b)
3. 波多野想「開発初期の金瓜石鉱山における空間整備—日本植民地化台湾における鉱山景観の形成—」『土木史研究 講演集』Vol.35、2015、土木学会
4. 波多野想「明治30年代瑞芳及金瓜石鉱山之設施與空間配置の實際狀態」『新北市立黄金博物館學刊』第3期、2015、pp.50-72
5. ミシェル・ド・セルトー(山田登世子訳)『日常の實踐のポイエティック』国文社、1987
6. 中華民國自然歩道協會『台北縣黄金博物園區 金瓜石老礦工口述歷史暨影像紀錄 期末報告～聚落地景編』台北縣鶯歌陶瓷博物館、2005
7. 台北市古風史蹟協會『九份口述歷史與解說資料彙編』行政院文化建設委員會、1994
8. 唐羽『臺灣採金七百年』臺北市錦綿助學基金會、1985
9. 「本島最初の鑛業調査報告(上)」『臺灣鑛業會報』第121号、1925
10. 曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2003
11. 島根県教育委員会『瑞芳鉱山・金瓜石鉱山と近代石見銀山』島根県教育委員会、2017
12. 野村愛正『木村久太郎翁』木村国治、1938
13. 齋藤精一「臺灣瑞芳地方金山ノ現状ヲ目撃シ將來ヲ慮ルノ卑見」『日本鑛業會誌』、1897、第185号
14. 西村三木雄「報告」(石井八萬次郎他『鑛山視察復命書』(國史館臺灣文獻館所藏)、1896。